

近世の白話小説訓訳本に見られる文末表現「ジャ」について

馬静雯 (名古屋大学大学院)

【要旨】

江戸時代の白話小説訓訳本『照世盃』の右訓には口語的な文末表現「ジャ」が現われる。その数は多くないが、同時代の他の訓訳本、訓点資料(四書五経など)及び唐話資料と比べると、特異である。本稿では右訓に現われている「ジャ」の使用状況を中心に考察を行なった。その結果、右訓の「ジャ」は主に話し手が一般階級であり、聞き手が話し手と対等で親しい関係を持つ者である場合に用いられる。このような傾向は訓訳本の左訓及び同時期の斬本における「ジャ」にも見られる。一方、『照世盃』の右訓には古来の訓点資料に慣用されている「ナリ」(終止形)の数が非常に少ない。用いられる場合、その使用者の階層は右訓の「ジャ」より少し高いようであり、「ジャ」と位相上の対立が窺える。このような対立は訓訳本の左訓及び『照世盃』以前の口語資料には見られないが、『照世盃』以降の口語資料にはやや対立が見られる。調査結果から訓訳本の右訓は当時の口語から影響を受けたことが分かった。

1. はじめに

江戸時代、四書五経の他に、明清時代の口語に近い言葉で書かれた中国の白話小説も訓読されていた。訓読に加えてさらに、原文の左側に難解な語と短文の意味が付けられるものもある。これを本稿では「訓訳本」と呼ぶ。また、原文の右側におけるものを「右訓」¹、左側におけるものを「左訓」と呼ぶ(本稿は横書きであるため、以下、例文を掲出する際には原文の「右訓」を漢字・漢語の上側に、「左訓」を下側に示す)。訓読法に従って訓読されたものからなる「右訓」は全体的に文語的な性格が強い。それに対し、当時の言葉で原文を分かりやすく解釈するものからなる「左訓」は口語的な性格が強い。つまり、訓訳本には性格が異なる複数の文体が並存している。このような特徴を有している訓訳本は江戸時代の言語資料の一種として、一定の価値が認められると思われる。しかし、それに関する研究はあまりにも稀である。訓訳本には具体的にどのような言葉と表現が使われているのか、訓訳本の右訓と左訓はそれぞれどのような特徴を有しているのか、訓訳本は江戸時代の言語資料の中にどのような位置にあるのか、研究の余地はまだ多くある。そこで、本稿では訓訳本の右訓における特殊な文末表現「ジャ」の使用状況を通して、訓訳本の右訓の性格をさらに明らかにしていきたい。

文末表現「ジャ」は「ニテアリ」が「デアル→デア」、さらに音変化したものであり、江戸時代の口語資料に多用されることは周知である。本居宣長著『古今集遠鏡』には次のような記述が見え、「ジャ」の口語性と俚俗性が肯定されている(下線は筆者による)。

なり なる なれば ヂャと訳す、ヂャはデアルのつづまりて、ルのはぶかりたる也、さる故に、東の国々にては、ダといへり、なりももとにありのつづまりたるなれば、俗言のヂャ ダとも一つ言也
『古今集遠鏡』端書、九オ

¹ 主に送り仮名、振り仮名の位置にあるものを指すが、振り仮名が付いていない音読されたものも含む。

「ジャ」が当時の日常語で解釈する比較的的口語性の強いもの、つまり左訓の位置に現われるのは自然なことかもしれない。しかし、近世の白話小説訓訳本『照世盃』²の文語的性格が強いはずの右訓にはこのような口語性と俚俗性を持つ文末表現「ジャ」が現われる。もちろん、原文は口語に近い白話で書かれたものなので、一定の範囲内でこのような特殊な表現が容認されうるが、『照世盃』以外の訓訳本と比べると、やはりその右訓に現われる「ジャ」は特異であろう。次の表1、表2を見てみよう。

表1 近世の白話小説訓訳本における文末表現「ジャ」の用例数と分布

		小説精言	小説奇言	小説粹言	覚後禅	照世盃	合計
ジャ	右訓	0	0	0	0	7	7
	左訓	1	2	4	5	28	40

表2 近世の白話小説訓訳本の右訓における断定を表す文末表現の様相(肯定の場合)

		小説精言	小説奇言	小説粹言	覚後禅	照世盃	合計
タリ系	タリ	1	0	1	1	0	3
ナリ系	ナリ	113	100	67	87	4	574
	也? ³	2	27	13	46	9	
	ナル	7	7	14	11	18	
	ナラン	6	12	5	7	19	
ジャ系	ジャ	0	0	0	0	7	7
ゾ系	ゾ	0	0	0	0	3	3
その他	ナリ了ス	0	0	0	10	0	24
	了ス	0	0	0	14	0	

文末表現「ジャ」はいずれの訓訳本の左訓にも見られる。しかし、右訓に現われるのは『照世盃』しかない。『照世盃』以外の訓訳本の右訓に使用されている断定を表す文末表現(肯定の場合)には「ナリ系」⁴が524件、「タリ系」が3件、「その他」が24件ある。「ナリ系」「タリ系」は古来の訓点資料に慣用されている文末表現であり、訓訳本と同時代の訓点資料(四書五経など)及び唐話資料⁵にも使われている。しかし、いずれの資料でも、「ナリ系」が優勢で、

² ゆまに書房『照世盃：付・中世二伝奇』(1976)に所収されている訓訳本『照世盃』(明和二年)を使用した。

³ 訓訳本には「ナリ」と読むか否か断言できない「也」がある。これらの「也」を訓訳本の文末表現として扱うべきかどうかは疑問である。本稿では一応文末表現の一種と見なし、「ナリ系」に入れることとする。

⁴ 本稿では終止形「ナリ」(「也」)、未然形「ナラ」、連体形「ナル」などを合わせて「ナリ系」と呼ぶ。「タリ系」も同様である。

⁵ 調査した漢文資料：文之点(『大魁四書集註』、寛永九(1632)年、早稲田大学図書館所蔵)、道春点(『四書集註』、寛政三(1791)年、国立公文書館所蔵)、石斎点(『四書集註大全』、慶安四(1651)年、国立公文書館所蔵)、仁斎点(『論語古義』、明治三十二(1909)年、国立国会図書館所蔵)、楊斎点(『四書示蒙句解』、元禄十四(1701)年、早稲田大学図書館所蔵)、春台点(『論語古訓正文』、宝暦四(1754)

「タリ系」が劣勢である状況を呈しており、「ジャ」の用例は見られない。

以下、訓訳本『照世盃』の右訓に見られる7例の「ジャ」を中心に考察していく。具体的に言えば、まず、「ジャ」の使用場面及び使用者を観察し、右訓における「ジャ」以外の文末表現（特に「ナリ」）及び『照世盃』の左訓における文末表現の使用状況と比較して、右訓に現われる「ジャ」の特徴をまとめる。次に、『照世盃』以外の訓訳本の左訓及び訓訳本『照世盃』の刊行時期の前後に出版された断本における「ジャ」と「ナリ」の使用状況を確認し、訓訳本の右訓に使用されている「ジャ」と口語性の高い資料における「ジャ」の異同点を指摘する。最後に、以上の考察結果に基づき、「ジャ」の使用から見られる白話小説訓訳本の右訓の性格を指摘する。

2. 訓訳本『照世盃』及びその訓訳者

『照世盃』は「七松園弄仮成真」「百和坊将無作有」「走安南玉馬換猩絨」「堀新坑怪鬼成財主」という四つの物語からなる中国の清代短篇白話小説集である。中国では早くから佚存書となった。1928年、海寧の陳氏が「日本伝鈔本」に拠って『古佚小説叢刊』に収め、始めてテキストが中国に逆輸入された⁶と言われている。

日本では、風月堂荘左衛門刊『小説奇言』（宝暦三(1753)年）の「嗣刻小説」の目録に「照世盃」が載っており、また、後の『小説粹言』（宝暦八(1758)年刊）の刊記にも「照世盃 四回嗣刻」が見える。しかし、今日知られている訓訳本は、明和二(1765)年、皇都書肆日野屋源七によって出版された半紙本四巻五冊のものである。風月堂荘左衛門刊の『照世盃』が存在しているかどうかは不明である。本稿ではゆまに書房『照世盃：付・中世二伝奇』（1976）に所収されている訓訳本『照世盃』を使用することとする。

訓訳本『照世盃』の訓訳者は、徳田(1976)及び川上(2004)の考察によると、越前藩の藩儒である清田儋叟である。清田儋叟について、石崎(1967)に次のように紹介されている⁷。

儋叟(享保四一天明五、六七)は江村北海の弟で、名は絢字は君錦、播磨の産、越前侯の文學、伊藤龍洲に學ぶ。藝苑談・孔雀樓文集・同筆記等の著者である。其の唐音學は白駒一派の間で修得したものであるが、支那小説を耽讀したことは京都の本城維新芳譯「通俗平妖傳」寛政九年皆川淇園の序に詳かである

また、中村幸彦編『近世白話小説翻訳集 第5巻』に収録されている『通俗平妖傳』の序には、

友人清君錦亦酷好之、每會互舉其文奇者、以爲談資、後又遂與君錦競共讀他演奇小説、如西遊・西洋・金瓶・封神・女僊・禪眞等諸書。無不遍讀……(中

年、国文学研究資料館所蔵)

調査した唐話辞書：『唐話纂要』享保元(1716)年、『唐音雅俗語類』享保十一(1726)年、『唐譯便覽』享保十一(1726)年、『唐話使用』享保二十(1735)年(『唐話辞書類集 第6集』『唐話辞書類集 第7集』所収)

また、白話小説の通俗訳本については岡田(2006: 354-399)を参照されたい。

⁶ 徳田(1976): 453

⁷ 石崎(1967): 165

略)最後得平妖傳-讀之(中略)與君錦弟章-玩讀不_レ已。此距_レ今四十餘年前事也⁸

という記述が見える。多くの白話小説を通読したことから見れば、相当の中国語読解力を備えているようである。漢学にも唐音学にも詳しい人物であるので、訓読する際に口語的な表現「ジャ」を使用するにはそれなりの理由があると考えられる。

訓訳本『照世盃』の巻首に、訓訳者清田儋叟が書いた「讀俗文三條」が付いている。その中に「俗文ノ書ヲ譯スルハ句ヲ逐テ譯ヲ施ス。譯ニ定訓正義有テ無シ。是ヲ譯ノ大本領トス。」「二三ヲ擧テ千萬ヲ推テ知ルベシ。必板定ノ譯ヲナシ。字訓ニ拘レバ本義ヲ失フコト多シ」(下線は筆者による)のような語句が見える。この「俗文ノ書」は「水滸伝」「照世盃」などの白話小説を指す。「俗文」という言葉から、訓訳者が「照世盃」の俚俗性を認めていることが分かる。また、「定訓正義有テ無シ」「必板定ノ譯ヲナシ」などは、「讀俗文三條」に挙げている例から見れば、「定訓」「定ノ譯」は左訓のことを指すのであるが、右訓を添加した際には、多少「字訓ニ拘レバ本義ヲ失フコト多シ」という考えも持っているのではないかと思う。つまり、原文は俚俗性のあるものであるので、訓訳者が訓読する際に、文義、文脈など場合によって俗的、口語的な表現も使用することができるのであろうという意識を有しているのかもしれない。実際、「ジャ」の他、『照世盃』の右訓には「ワイ」「タ(過去)」なども見られ、訓訳本の中では口語的な要素が一番多いと言える。

次章から「ジャ」の使用状況などに関する具体的な考察に入る。

3. 訓訳本『照世盃』に見られる「ジャ」の使用状況と特徴

3.1 右訓に見られる「ジャ」の使用場面と使用者

右訓の「ジャ」は、全て送り仮名の位置にあり、原文には「ジャ」に当てられる語(例えば、「也」など)が見られない。また、右訓の「ジャ」は、次の例(1)以外は、全て会話文に現われる。

(1) 那班_{カノヤクシヨコノ}衛_ヘ門裡_ノ朋_ト友_ト最_キ好_ク結_レ交_ヲ、他_レ也_レ不_レ知_ニ道_{ナニカ}甚_ニ麼_カ是_レ名_ト士_トシ_ニエ_ト云_{コト}ヲ_モ、但_レ見_テヨ

扇_ノ子_上有_ル一_首ノ_盃詩_一、僂_キ也_レ稱_レ好_ト我_キ也_レ道_レ妙_ト。

「照」巻二、三ウ⁹

例(1)の原文は作者の解説であり、地の文である。「役所で(あまり知識のない)下級役人と付き合うのは最も容易である。彼らは「名士とは何者か」ということさえ知らず、(歐滁山という人からもらった)扇子に一首の詩が書いてあるのを見ると、(よい詩か否かも知らずに)誰でも「よい」と称賛している」という意味である。例(1)の「ジャ」は「甚_{ナニカ}麼_カ是_レ名_ト士_トジャ」という下級役人が心に思っていることを述べる心話文に現われるため、その使用者は下級役人と見な

⁸ 中村(1985): 8-9

⁹ 本稿は横書きであるため、訓訳本の原文の右側にあるものを漢字・漢語の上側、原文の左側にあるものを漢字・漢語の下側に置くこととする。また、特殊な仮名(合略仮名)を一般的な仮名に改める。漢字はできるだけ原文の通りに示すが、対応の漢字がない場合、現字体に改めることもある。下線と句読点は筆者による。

すことができよう。

以下の6例は聞き手が存在する会話文である。会話文の「ジャ」は概ね身分の高くない話し手が、聞き手が陳述したこと或いは質問に対する答えに現われる。また、話し手と聞き手は初対面の人ではなく、知り合いである。

(2) 阮江蘭背_ア著_テ身_ム體_ヲ笑_ヒ道、好_ク箇_ノ爲_ニ自_ラ家_ノ娶_ニ老_シ婆_ヲ的_ニ古_ク押_シ衙_ヅ。

「照」巻一、三十一オ

(3) 金有方道_フ、主_ク客_ハ雖_モ是_レ好_ト的_ニ、聞_ケ得_ル他_ノ某_ノ處_ニ輸_ニ去_リ金_ヲ、某_ノ處_ニ又_モ被_レト_ク人_ニ贏_ニ去_リ房_ヲ、近_ク來_ルハ_モ是_レ一_ノ箇_ノ隔_リ皮_兒ヅ_レ哩。

「照」巻四、二十六ウ

(4) 朱春輝道_フ、爾_ヲ看_ム、這_ノ起_ル推_シ髻_{セル}婦_ノ女_ノ手_ノ内_ニ捧_ニ着_{セル}ハ_レ珊_瑚的_ニ、都_テ是_レ國_ノ内_ノ官_ノ家_ノ大_ノ族_ノ的_ニ夫_ノ人_ノ小_ノ姐_ヅ。

杜景山道_フ、好_ク大_ニ珊_瑚、眞_ニ寶_ノ貝_ヅ了_。

「照」巻三、二十二オ

(5) 若_シ斷_ニ絶_セ門_ノ徒_ヲ、活_ク活_ク要_ニ餓_ニ殺_ス我_レ這_ノ有_ル子_ノ的_ニ和_シ尚_ヅ了_。

「照」巻四、九オ

例(2)は話し手が以前惚れた女の話「あの方の親切を誤解しないでください。彼は押衙¹⁰のようないい人です」に対しての答えである。話し手の阮江蘭は郷試に及第し「解元」になったばかり、官吏になる資格は備えているが、正式な官位はまだ得ていない書生である。聞き手は以前、話し手と親密な関係を有している女であり、二人の地位は対等である。

例(3)は話し手が、賭博に行こうとする聞き手が狙うお金持ちの名前を聞いて、聞き手にその狙われる人物の現状を教える場面である。「その客はいいと言っても、最近、どこかでばかりに負けて、お金も家屋もなくなったそう。今の彼は何もない人だよ」という意味である。例(3)の話し手金有方は意地悪い秀才であり、さらに賭博にのめりこんで、自分の甥さえ騙した人物である。聞き手は話し手と常に一緒に賭博をやる友人である。

例(4)は、安南国で他郷出身の二人が、安南国の国王が聖僧を迎える鑾駕の通過を見ながら話し合っている場面である。例(4)には二つの「ジャ」が見られる。一番目の「ジャ」の使用者朱春輝は安南国の風習に詳しい者である。この話は朱が初めて安南国に来た聞き手杜景山の疑問に対する解答の一部である。二番目の「ジャ」の使用者杜景山は、地方官に意地悪され、仕方なく地方官が要求した商品を仕入れに安南国に来た者である。「たいへん大きな珊瑚ですね。眞の宝物です！」は朱が陳述したことに対する感嘆の話である。朱と杜は安南国で知り合いに

¹⁰ 唐人の伝奇小説『無双伝』に現われる人物である。高官の娘劉無双が、争乱によって父を失い後宮へ入れられたが、幼なじみの王仙客や、古押衙の力で後宮から出て、仙客と添いとげる物語である。後に、「古押衙」は義侠のことを指すようになった。

なった同郷の人であり、二人とも資産が豊かで、手広く商売をしている富裕商人層に属するのではなく、身分の高くない小商人である。

例(5)は話し手が不適当な言論で衆人の怒りを買った際に言い出した話である。話し手は自分を和尚に喩え、衆人を信者に喩えて、「もし信者がいないと、このひげのある和尚は死ぬしかないよ」と冗談を言った。話し手は村に公衆便所を造って人の排泄物を肥料として売る人であり、聞き手は公衆便所に来る話し手の近所の人々(村民)である。話し手と聞き手の間には地位的な差がないと言える。

以上の例における「ジャ」の使用状況とやや違う例も見られる。

(6) 訓「蒙先生道ヲ、這レハ是レ齒「爵堂トモ三「箇ノ字ジヤ。 「照」巻四、三ウ

例(6)は文盲の者が看板に書いてある文字の読み方を尋ねる際に、訓蒙先生が「これは齒爵堂というのだ」と答える場面である。例(6)の話し手訓蒙先生は、子どもや初心者を教えさす者である。聞き手は例(5)の話し手であり、すなわち公衆便所を造る者である。話し手の地位は聞き手より高く、二人は初対面かどうか不明である。しかし、後文には聞き手の息子が「一「向ニ在テ蒙「館ニ讀ムレ書ヲ」という記述が見える。ここの「蒙館」は恐らく訓蒙先生が教える場所であろう。なので、話し手と聞き手の地位が対等ではないが、互いに知り合いであることが確認できる。

以上、『照世盃』の右訓に現われる文末表現「ジャ」の使用場面と使用者を考察した。白話小説に登場する人物は、五つの訓訳本に見られるように、書生、小商人、農民など官位や爵位を持たない一般階層の者が多数であるが、まれに和尚、大商人、官吏などが見られる。しかし、いずれも社会的地位が非常に高い者ではない。官位を持つ官吏であっても、概ね「安撫」「知県」のような地方官である。だが、白話小説の世界、少なくとも訓訳本の世界では、「安撫」「知県」のような官吏であっても、既に社会的地位が高い者と見なすことができる。それと比べると、官位を持っていない書生、小商人、農民などは身分が比較的に低い者であろう。『照世盃』の右訓に現われる七つの「ジャ」は、その使用者はそれぞれ下級役人、(官位を持っていない)書生、賭博愛好者の秀才、小商人、糞売りしている文盲、訓蒙先生であり、(王族、貴族、官吏、豪商など一定の社会的地位を有している者以外の)一般階級の者に偏っていると言える。また、以上の考察から、聞き手は主に話し手と対等な地位におり、話し手の知り合いであることも分かった。

次節では、『照世盃』の右訓に現われる「ジャ」以外の文末表現、特に訓点資料及びその他の訓訳本に多用される伝統的な文末表現「ナリ系」の使用状況を調査し、「ジャ」と比較する。

3.2 右訓に見られる「ジャ」以外の文末表現の使用状況

『照世盃』の右訓には、断定を表す「ジャ」以外に、「ゾ」「ナリ」も併用されており、文末が無表記、つまり体言で文を終える例も少なくない。ここでは会話文・心話文に使われる「ジャ」と比較するため、地の文の例を対象外とする。また、会話文・心話文に使われる断定を表す文末表現には、「体言止め」が一番多いが、あまり傾向が見られないので、これらの例も対象から除外する。

「ゾ」は3例見られる。

(7) 正ニ要スルトキハレ動シトレ手ヲ、那ノ一箇下路ノ朋友止住シテ道ヲ、盟ノ兄不レ須イニ造次ニスル
トリサヘ シ マ ツ シ テ レ ナ

コトヲ、這レハ是レ敵ニ同社江蘭兄ト云入ソ。 「照」巻一、二十ウ
ワシガトキタチ

(8) 見ニ差ニ官出ニ來ニ道ヲ、爾眞ニ是レ天ノ大ノ福ノ分。不レ知老翁爲ニレ何ノ切骨ニ恨ミシレ爾ヲ、
バクタイノ キ ッ フ

見ニ了狸ニ絨ヲ、冷ニ笑スルコト一ニ笑ヲ道ヲ、是レ便宜ト、那ノ狗ノ頭就チ拿ニ出ニ封ノ銀ノ子ヲ來
ヌガフ殿シテテ云ノ語

テ説ク、是レ給(マヤ)ニ與スルノ爾ニ的官ノ價ト。 「照」巻三、三十五ウ

(9) 杜景山問ニ道、這レハ是レ甚ニ麼ノ故ノ事ト。

朱春輝道ヲ、是レハ他ノ們國ノ裡ノ的郷ノ風ト。 「照」巻三、二十二オ

ここの「ゾ」は「コレ(ハ)〈体言〉ゾ」という形で、体言の後に付き、「コレ(ハ)」と共に、断定を表す。断定の「ゾ」について、春日(1968)ではその口語性が指摘された¹¹⁾。口語的な「ゾ」は、訓訳本では『照世盃』の右訓にしか見られない文末表現であり、同じく口語的な性格を有している「ジャ」の使用状況とは、大きな差がないようである。

一方、終止形「ナリ」(「也」も含む)は13例である。他の訓訳本と比べると、非常に少ないと言える(「精言」は115例、「奇言」は127例、「粹言」は80例、『覚後禅』は133例)。また、会話文には、4例しかない。この4例のうち3例は「也」という形で、1例は送り仮名の位置にあって原文には「也」がない。

(10) 那先ニ生開ニ講シ道ヲ、……此レ製スルニ馬ニ弔ヲニ之來歴也。……此レ運ニ動スル馬ニ弔ヲニ之學
問也。……此レ後ニ世壞スルニ馬ニ弔ヲニ之流弊也。 「照」巻四、十六オ～十七オ

(11) 三ニ太爺大ニ喜シ道ヲ、這ノ段ノ姻ニ縁絶ニ妙ニ了了的。 「照」巻二、十五ウ

例(10)は話し手が学生に「馬弔」の歴史などを解説する場面である。話し手は「弔師」と呼ばれ、すなわち「馬弔」というカルタの遊び方を教える者である。「馬弔」が賭博に関係があるかどうかはともかく、専門の教師として多くの人々に尊敬されているから、その「弔師」の社会的地位が低いとは言えないであろう。また、話し手に対して、聞き手が目下の者であるうえ、親しい関係を持たない者でもある。しかし、ここの「ナリ」はやはり原文に制限されるところが大きいので、好例とは言いがたい。

会話文に訓訳者の意志によって「ナリ」が付けられるのは例(11)の1例のみであろう。例(11)の話し手は「三太爺」である。「三太爺」は高齢の者であり、他人に対して、自分は元地方官の弟と紹介したが、実は偽者である。その正体は詐欺を常習とするグループの一員である。しかし、例(11)の聞き手にその話を言った際は、その偽装がまだ見破られていなかったため、発話時の話し手はまだ「地方官の弟」という身分である。聞き手はお金持ちの女性と結婚したが

¹¹⁾ 春日(1968): 179

る書生である。話し手は官吏の家族として、そして高齢者として、目下の書生に対して話す際に、「ナリ」が使用された。話し手と聞き手は初対面の人ではないが、親しい関係でもない。

実は、「ナリ系」文末表現には、終止形「ナリ」以外に、連体形「ナル」、未然形「ナラ(＋ン)」の例も見られる(例(12)～(18))。しかし、これらの例は「ジャ」の比較対象になれないと考える。なぜかという、連体形「ナル」、未然形「ナラ(＋ン)」の使用は話し手の身分に関係なく、係り結び、接続法などの文法規則に関わるものがほとんどであるからである。

- (12) 杜景山聽得果^レ是嚇^レ呆^シ了、問^二道、店^レ官怎^レ麼^レ煩^レ難^{ナル}。 「照」卷三、十九オ
- (13) 訓蒙先^レ生道^フ、可^シ是^レ要^{スル}ナル^レ寫^{スル}コトヲ^二門^レ聯^フ麼^ヤ。 「照」卷四、四オ
- (14) 也^ク須^ク下^二通^二知^シ他^ニ做^{シテ}主^ト纔^ニ妙^{ナル}上^レ。 「照」卷二、十三オ
シラセ セワサセ
- (15) 當^レ日相^二約^{スル}同^一舟^ヲ、何^ノ故^ニ拒^レ絶^{スル}コトノ過^レ甚^{ナル}。 「照」卷一、二十一オ
- (16) 阮江蘭噴^レ噴^レ羨^レ慕^道フ、……豈^ニ是^レ尋^ニ常^ニ脂^粉ナランヤ。 「照」卷一、三ウ
キツ フクラヤミ ユクナミノワナゴ
- (17) 朱春輝道^フ、……今^レ日想^ニ是^レ迎^テ他^ヲ到^二宮^レ裡^ニ去^ルナラント。 「照」卷三、二十一ウ
ソレ
- (18) 杜景山道^フ、造^レ化^造化、有^ルノ^二人^ニ烟^ニ的^所在^了。且^ツ走^上前^ヲ要^レ緊^{ナラント}。 「照」卷三、二十七オ
シハセ ヒトザトガアルソウナ ハヤクハンツテニキクイ

要するに、右訓における「ナリ」(終止形)は、用例が少ないが、その使用者は一般階級より少し高い、一定の社会的地位を有した者である。そして「ナリ」の聞き手は話し手より目下で、話し手と親しい関係を持たない人である。つまり、『照世盃』の会話文の右訓における「ジャ」と終止形「ナリ」の使用者は階層上に対立した様相を呈している。

3.3 左訓に見られる「ジャ」の使用状況

『照世盃』の左訓には、終止形「ナリ」だけでなく、未然形「ナラ」、連体形「ナル」さえ見られなかった。一方、「ジャ」は27例ある。左訓の「ジャ」は、多くは会話文、心話文或いは独話文に現われるが、作者が仮の読者と対話するという会話風の地の文に現われる例もある。その使用者は(作者、仮の読者)、名妓、所の者¹²、書生、小商人、小商人の妻、下級役人、官吏の妻などであり、ほとんどは一般階級に属する者である。また、会話文の場合、話し手と聞き手とは対等な地位におり、親しい関係であるのが多数である。特に左訓には、同じ話し手と聞き手、初対面の会話では「デゴザル」が使用されるが、少し馴染むと「ジャ」になる例も見られ、親しい関係である場合に「ジャ」が用いられることを示す証拠であろう。

以上の調査結果から、『照世盃』の右訓における「ジャ」の使用上の傾向はその左訓における「ジャ」にも見られることが分かった。しかし、『照世盃』の左訓には「ナリ系」文末表現がないため、「ジャ」と「ナリ」の使用上の傾向と差異は『照世盃』の右訓にしか見られない独特な点であろうか。或いは同時期の口語からの影響を受けたのであろうか。『照世盃』と同

¹² 本稿ではその土地に住んでいる一般民衆を指す。

時期の口語資料を調査する必要があると考える。

4. 『照世盃』と同時期の口語資料に見られる「ジャ」と「ナリ」

『照世盃』と同時期の口語資料について、本稿では『照世盃』以外の訓訳本の左訓及び『照世盃』の前後に刊行された上方版の癖本(『軽口豊年遊』宝暦四(1754)年、『軽口東方朔』宝暦十二(1762)年、『軽口扇の的』宝暦十二(1762)年、『軽口はるの山』明和五(1768)年、『軽口片類笑』明和七(1770)年)¹³を調査対象とする。調査範囲は会話文、心話文、独話文に限る。また、訓読法に従って訓読されたものより言語選択の自由度が高いので、文末に現われる「ナル」「ナラン」などは作者の意志によるものだと見なすことができると考え、考慮に入れる。

4.1 訓訳本の左訓に見られる「ジャ」と「ナリ」

訓訳本の左訓に使われる言葉や表現は右訓と比べると、口語性が比較的に高く、時代性も見られるので、江戸時代中期の口語資料の一種として扱うことができると思われる。

『小説精言』には「ジャ」「ナリ」、『小説奇言』には「ジャ」「ナリ」「ナラン」「ナル」「デアロ」、『小説粹言』には「ジャ」「ナリ」「デアラフ」、『覚後禪』には「ジャ」「ナリ」「デアラフ」「デアル」「デゴザリマス」がある。つまり、『照世盃』以外の四つの訓訳本の左訓には「ジャ」と「ナリ」が並存している。

「ジャ」の使用状況について具体的に言えば、『小説精言』の左訓に現われる「ジャ」は1例であり、平民の家の乳母の心話文に使用される。『小説奇言』は2例であり、小さい店の店主の話に現われ、話し手と聞き手との関係が親しい。『小説粹言』は4例であり、全て小商人の話に現われる。そのうち、2例の聞き手は売買で知り合いになった者であり、残った2例は以前知り合った者の妻である。そして『覚後禪』は5例である。1例は書生の心話文に現われ、残った4例はそれぞれ名高い盗賊、書生、書生、官吏の妻の話に現われ、話し手と聞き手は友人関係または男女関係である。つまり、訓訳本の左訓における「ジャ」の使用状況は以上述べた『照世盃』の右訓、左訓における「ジャ」の傾向とほぼ一致している。

一方、左訓に現われる「ナリ」の使用者については次に示すように、あまり傾向が見られないようである。

『小説精言』(7例)：所の者4例、小商人1例、和尚1例、官吏1例

『小説奇言』(11例)：官吏4例、所の者3例、金持ち2例、子供1例、書生1例

『小説粹言』(6例)：小商人5例、所の者1例

『覚後禪』(2例)：書生1例、使用人1例

その聞き手には目下、対等及び目上の者がある以上、話し手と親しい関係を持つ者も見られ

¹³ 上方版の癖本を使用した理由は二つある。一つは、『照世盃』の訓訳者清田儋叟は京都出身であるからである。もう一つは、この時期の洒落本、浄瑠璃には登場人物の位相に偏りがあるため、「話が短い割には様々な位相の人物が、生き生きとした会話で遣り取りする」(前田2015:1)と評価されている癖本のほうが適切であると考えからである。本稿では1976年東京堂出版の『癖本大系 第八巻』を使用する。

る。さらに、同一人物でも、二つ以上の文末断定表現が使用される例もある。

(19) 呂_シ客_ニ人_ハ想_フ ヒ_シ了_ル一_ハ回_シテ道、是_ハ了_レ是_レ了_レ、…… 「粹言」巻五、二十一ウ
シアン サフジエサフジエ

(20) 呂_シ大_ニ叩_キ頭_ニシテ道、……見_レフ_ニ我_ガ久_{シク}出_テ不_レ歸_ラ、也_ダ該_シ 三有_レ人_來テ問_フニ個_ノ消_シ息_ヲ
ハズナド

ヲ。若_シ查_ニ 一出_セハ ルルコト被_レ毆_ニ傷_セ命_ヲ、就_チ該_シ 下到_ニ府_ニ縣_ニ告_レ理_ヲ上。……
ギンミシイダサハ ハズナド ツグコトハル

「粹言」巻五、二十二ウ

例(19)の話し手「呂客人」と例(20)の話し手「呂大」は同じ者である。しかし、例(19)の聞き手は知り合いの者の妻であり、例(20)の聞き手は地方官である。この二つの例から見ると、使用者の身分というより、左訓における「ジャ」と「ナリ」の使い分けは話し手と聞き手の地位差、親疎関係などによるのかもしれない。

要するに、『照世盃』以前の訓訳本の左訓には「ジャ」の使用状況は『照世盃』の「ジャ」とほぼ同じ傾向を有しているが、「ナリ」との差異、特に位相の差がまだ明らかではない。もちろん、訓訳本の左訓は断片的な訳文からなるものであるため、少数の例で断言することができない。次節では断本の状況を見ていく。

4.2 断本に見られる「ジャ」と「ナリ」

次の表3は断本における「ジャ」と「ナリ」の用例数と分布を示したものである。

表3 断本における「ジャ」と「ナリ」の用例数と分布

	軽口豊年遊(1754)	軽口東方朔(1762)	軽口扇的(1762)	軽口はるの山(1768)	軽口片類笑(1770)	合計
ジャ	16	12	17	31	50	126
ナリ	0	16	1	4	13	34

全体的には「ナリ」より「ジャ」の出現頻度が高い。

『軽口豊年遊』(1754)には「ナリ」の例が見られなかった。「ジャ」は16例あり、その使用者は所の者(10例)、丁稚(5例)、小僧(1例)である。会話文の場合、話し手と聞き手とは地位的に差がない例がほとんどであり、友人、近所の人、主従など親しい関係の例数がやや多い。

『軽口東方朔』(1762)では「ジャ」より「ナリ」のほうが例数が多い。しかし、その使用者の階層はいずれも差が大きい。「ナリ」は所の者(7例)、粹なる客(2例)、亭主/小商人(2例)、家主(1例)、富人(1例)、遊女(1例)、小僕(1例)、乞食者(1例)であるのに対し、「ジャ」は所の者(7例)、家主(2例)、粹なる客(1例)、氏神(1例)、妖怪(1例)である。会話文の場合、話し手と聞き手の地位差及び親疎関係にもあまり傾向がないようである。

『軽口扇的』(1762)には「連体形ナル+助詞ガ」という形が1例見られ、西国辺の金持ちの話に現われる。聞き手は罌屋の主であり、二人は初対面の関係である。「ジャ」の使用者には所の者(12例)、家主(3例)、小商人(1例)、下僕(1例)があり、親しい関係を持つ者の会話

が多数である。

『照世盃』以降に刊行された『軽口はるの山』(1768)における「ナリ」の使用者は侍(2例)、庄屋(1例)、所の者(1例)であり、「ジャ」の使用者は所の者(28例)、丁稚(1例)、乞食者(1例)、幽霊(1例)である。そして『軽口片類笑』(1770)の「ナリ」は所の者(3例)、亭主(2例)、医者(2例)、大名の息子(2例)、大名(1例)、隠居(1例)、出家(1例)、閻魔王(1例)、「ジャ」は所の者(40例)、鬚奴(2例)、手代(1例)、店の者(1例)、亭主(1例)、家主(1例)、浪人(1例)、庄屋(1例)、隠居(1例)、儒者(1例)である。会話文における「ナリ」の場合、話し手と聞き手の地位差及び関係には偏りが見られないが、「ジャ」の場合、やはり地位が対等で親しい関係を持つ仲間同士のほうが一般的である。

- (21) でつちもうすやうハ、是ハ福神ジャ。すてんとをきなされませとゆう。
「捨大黒」『軽口豊年遊(四)』、1754
- (22) 主人こたへて、ハテ、十ぜんのくらいを、ねんがけるゆへジャ。
「てうてき」『軽口東方朔(一)』、1762
- (23) ていしゆ腹をたて、ときも時おりも折、にくるやつめかなと、すなハちやねよりひきづりをろし、せめて方角ハどこらジャ。
「助蔵火事見る事」『軽口扇的(二)』、1762
- (24) 近所のものあつまりて、扱々おびたゝしい事ジャ。あれは何になる事ジャといふを、…
「車にあんど」『軽口はるの山(四)』、1768
- (25) 息子が、それハあまり足もとを見た直段ジャ。高けれど親の事ジャ。宥貫で頼むといふ。
「足もと見る井戸替」『軽口片類笑(五)』、1770
- (26) こつじきさてもおそいあさめし也とそしりけれハ、……
「あさめし違」『軽口東方朔(一)』、1762
- (27) 西国辺のかねもち、……鏝を買てのち咄しに、我らハ西方の者なるが、……
「分限讓の事」『軽口扇的(一)』、1762
- (28) さる大名の御家中に、ことの外しハきさふらい衆ありけるか、江戸下りに男にいゝ付らるゝをきけば、いよ／＼明日江戸へ下るなり。供ハその方老人なり。……と申さるゝ。
「道中のかんりやく」『軽口はるの山(五)』、1768
- (29) 若殿聞し召、武士のうらかへるとハ不吉の詞也。気がゝりなれば、表がへなされたきよし也。
「大名のしわんぼ」『軽口片類笑(四)』、1770

まとめると、訓訳本『照世盃』の刊行時期前後の断本における文末表現「ジャ」の使用者はいずれの資料でも所の者、亭主など社会的地位が高くない一般階級に集中しており、会話文の場合、話し手と聞き手の関係は対等な地位にいる知り合いの例が優勢である。これは『照世盃』の右訓及び訓訳本の左訓における「ジャ」と同じ傾向であると言えよう。

他方、「ナリ」の場合、『照世盃』以前の断本における「ナリ」の使用者には富人もあれば、乞食者もあり、あまり傾向が見られないのに対し、それ以降の断本では「ナリ」の使用者は一般階級の者も多少見られるが、優勢を占めているのは医者、庄屋、大名のような一定の社会的地位を有している者である(17例のうち、一般階級は6例である)。しかし、会話文に現われる「ナリ」の使用者と聞き手の地位差及び親疎関係は混乱状態にある。当時実際の言語生活には

「ナリ」の使用不使用はそれらと大きな関係がないようである。

断本の考察結果から見れば、確かにその時期の「ジャ」と終止形「ナリ」の使用者には階層的に一定の傾向が見られ、そして両語は文語的と口語的だけでなく、位相上の対立も表面化するようになったと言えよう。もちろん、断本には「ジャ」「ナリ」以外に、「でござる」「である」「や」などの文末表現も存在している。加えて、断本は文学作品の一種として、言葉の使用には作者の意志が含まれているので、このような傾向或いは対立の検証にはさらなる調査が必要である。

4.3 まとめ

以上、『照世盃』以外の訓訳本の左訓及び『照世盃』の前後に刊行された断本における「ジャ」と「ナリ」の使用状況を調査した。口語資料に現われる「ナリ」の用法は錯綜しているが、「ジャ」は『照世盃』の右訓の「ジャ」の使用状況と概ね一致していることが確認できた。また、『照世盃』以降に刊行された断本には「ジャ」と「ナリ」の位相上の対立も多少見られるようになったことも確かめた。

5. 「ジャ」から見られる訓訳本の右訓の性格

右訓における「ジャ」から、当時の口語が白話小説の訓読に対する影響が見られる。

上述したように、『照世盃』の右訓における「ジャ」は同時期の口語資料の「ジャ」とは用法上の共通性が見られ、右訓に使われる「ジャ」と「ナリ」の差異は『照世盃』以降に刊行された断本に窺える。これは訓訳本が当時の口語の影響を受けたことの証拠の一つであろう。

また、「ジャ」と「ナリ」の用例数の差からもその影響が見られる。右訓における「ジャ」の用例数が7例であり、文法規則及び原文(「也」)に束縛されていない「ナリ」の用例数はただ1例だけである(地の文を含んでも4例しかない)。これは当時の断本に使われる「ジャ」と「ナリ」の多寡の状況と一致している。すなわち、全体的に「ジャ」が優勢で、「ナリ」の例が少ない¹⁴。このような状況は断本のみ限定されるものではない。

「ジャ」「ナリ」は指定表現とも呼ばれ、佐藤(1995)には次のような論述がある。

中世後期、指定のナリは衰退を始め、未然形や已然形は条件法に関わるもの为中心となり、連用形はほとんど使われなくなった。タリの衰退は一層顕著であり、文語的な文体において用いられるだけとなり、その一方でニテ・デ(アリ)やヂヤは勢力を拡大し、指定の中心的用法となった。

近世前期にはナリは一層勢力を弱め、並列用法の終止形ナリ、接続助詞化したナラバ・ナレバ・ナレドモ、副助詞化したナリトモなどに残る以外は、デ(アル)・ヂヤに圧倒された。¹⁵

¹⁴ 訓訳本の左訓は断片的な訳文であるため、当時使用される言葉と表現の意味用法などを観察することができ、言葉と表現の使用頻度などの観察が難しい。左訓における「ジャ」と「ナリ」の多寡が参考にならないと考えられる。また、断本の場合、口語資料と雖も、それぞれの作品の間に文体差が存する。筆者の調査によると、『軽口東方朔』に使われる言葉と表現は他の断本と比べると、文語性がやや強いと言える。「ジャ」より「ナリ」が多用されるのは文体によるところが大きいと思われる。

¹⁵ 佐藤(1995) : 140

佐藤(1995)に言及される指定表現の変遷は本稿の調査対象とした会話文(独話文・心話文)に限らないが、「ジャ」と「ナリ」の盛衰交替は早くから開始したことが分かる。そして近世中期になると、「ジャ」と「ナリ」は依然として勢力の差が存する。断本の会話文における指定表現の使用状況を例に言えば、「ジャ」の使用が優勢であり、「でござる」「であろう」と共に中心的な用法となった一方で、「ナリ」は劣勢にあった。訓訳本『照世盃』の右訓に現われる「ジャ」と終止形「ナリ」の用例数の多寡は当時の口語からの影響を受けた結果ではないかと考える。また、このことから、『照世盃』の右訓に、文末表現「ナリ」(肯定・終止形)が特に少ない原因も分かる。口語的文体の原文からの影響は言うまでもなく、当時の言語環境にも関わるのであろう。

しかし、『照世盃』の右訓には口語的な表現が使用されると言っても、全体的に言えば、やはり文語性が圧倒的である。指定表現の場合、例えば、訓訳本の左訓及び断本に「デアロ(ウ)」が使われるが、『照世盃』の右訓には全て「ナラン」である。また、本稿では扱っていない否定の場合、例外なく全て「ナラズ/ナラザル」である。訓訳本の右訓に見られる口語的な表現はごくわずかである。

6. おわりに

以上、訓訳本『照世盃』に見られる特殊な文末表現「ジャ」を中心に考察を行った。右訓の「ジャ」は主に一般階級の者の話に現われ、そして聞き手が話し手と対等で親しい関係を持つ者である。このような傾向は訓訳本の左訓及び同時期の断本における「ジャ」に共通している。また、右訓における「ジャ」と終止形「ナリ」の使用上に位相の差も見られるが、これは『照世盃』以降に刊行された断本にも多少窺える。以上の調査結果から、訓訳本の右訓に当時の口語からの影響があることが分かった。

しかし、『照世盃』の右訓における「ジャ」と終止形「ナリ」の用例が少ないうえ、今回の口語資料の調査範囲も訓訳本の左訓と五つの断本だけに限ったので、断言できないところが多く存在しており、さらなる調査が必要である。また、白話小説訓訳本の右訓には当時の口語からの影響が見られるのは『照世盃』だけではない。他の訓訳本における特殊な表現についての考察は今後の課題としたい。

参考文献

- 石崎又造(1967)『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂書房
 岡田袈裟男(2006)『江戸異言語接触：蘭語・唐話と近代日本語』笠間書院
 岡白駒・沢田一斎(施訓)、尾形仿(解説)(1976)『小説三言』、ゆまに書房
 川上陽介(2004)「『照世盃』の施訓者について」『京都大学国文学論叢』(11)：23-38
 佐藤武義(編著)(1995)『概説日本語の歴史』朝倉書店
 前田桂子(2015)「断本における程度強調表現「とんだ」について」『島大國文』(35)：1-22
 徳田武(1976)『清田儂叟年譜』『照世盃：附・中世二伝奇』ゆまに書房
 武藤禎夫、岡雅彦(編)(1976)『断本大系 第八巻』東京堂出版
 春日和男(1968)『存在詞に関する研究』風間書房
 中村幸彦編(1985)『近世白話小説翻訳集 第五巻』汲古書院

長澤規則也(解題)(1972)『唐話辭書類集 第6集』汲古書院

長澤規則也(解題)(1972)『唐話辭書類集 第7集』汲古書院

*本稿は中国国家留学基金(201608410122)の助成を受けたものである。